

# 12

月9日

いまは昔のミニレニウム



## ■忘年会のひとつき

時計は約束の7時をとくに回っていた。

「もう、先輩たちは集まっているんだろうな。遅れると、また酒の肴にされちゃうぞ、ヤバイ」

全力ダッシュで、駅から3分足らずの西麻布のオイスターバーへ向かう。店に入ると、馴染みの店員さんが「みなさん、お待ちですよ」と案内してくれた。

会社には、我が大学のサッカー部出身者が20人もいる。いまだに付き合いがあり、毎年12月の第2金曜日は恒例の忘年会と定め、そのほとんどが集まってくる。所属先はそれぞれ違うから、この集まりは社内の情報収集の場という意味でも貴重な機会だ。もともと仕事の話は最初だけで、後はサッカーの思い出話に花が咲き、互いの失敗談で盛り上がる。



「ヨウ！ 遅かったな。相変わらず不器用だから、仕事がキリよく終わらないだろう」

「そうそう、優柔不断な割には一途だからな。やり始めたら途中で放り出せないんだよ」

いきなり、これだ。こちらも、負けじと応戦する。

「それって、サッカー部の伝統じゃないですか。先輩たちを見習ってるだけですよ」

「言いたいことが言える風土は、サッカー部だからというだけじゃない。